蕨市立西小学校の取組

１　本校の概要

本校は昭和 24 年に開校し、今年で 69 周年を迎える。学校規模は児童数 421 名、15 学級である。

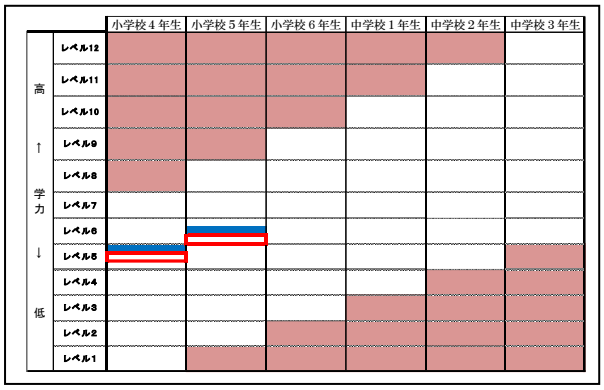
学校教育目標は「よく考え工夫する子、仲よく助けあう子、明るくつよい子」、目指す学校像は「子供たちが互いに学びあい、認めあう感動あふれる学校」、目指す児童像は「笑顔いっぱい　気持ちいっぱい　ひとみ輝く　西小っ子」である。校内研修では、「平成 29・30 年度埼玉県道徳教育研究推進モデル校」、「平成 29 年度いじめ防止のための望ましい人間関係づくり研究推進校」、「平成 28・29・30 年度蕨市教育委員会研究委嘱（道徳）」を受け、研究主題を「自分のよさを知り、互いに認め合う児童の育成～道徳的実践力を高める指導法の工夫～」とし、授業研究を中心とした実践的な研修により、他者と豊かに関わり合い、認め合いながら主体的に生きていくことのできる児童の育成に、全教職員一丸となって取り組んでいる。また、学習基盤の構築のため、学習規律の徹底を図っている。

２　平成２８・２９年度の結果

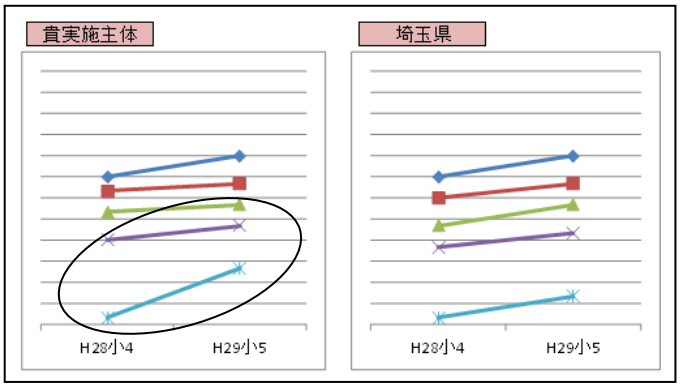
小学校４年生→小学校５年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【算数】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　小４から小５にかけて、下位層の伸びが大きい。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　自力解決の時間を保証した授業づくり

見通しから自力解決までの時間を確保し、児童が十分に思考できるようにした。特に下位層の児童には、本時の課題を意識させ、見通しを明確にもたせるとともに、どの既習事項を活用することで答えを導くことができるか気付かせることで、自力解決ができるように継続的に支援した。

イ　伝え合いの活動（言語活動）の設定と充実

特に下位層の児童には、じっくり考え自分の考えをもつことで、伝え合いの時間に相手に伝えられること、考えを聞くことで理解を深められることを継続的に指導してきた。

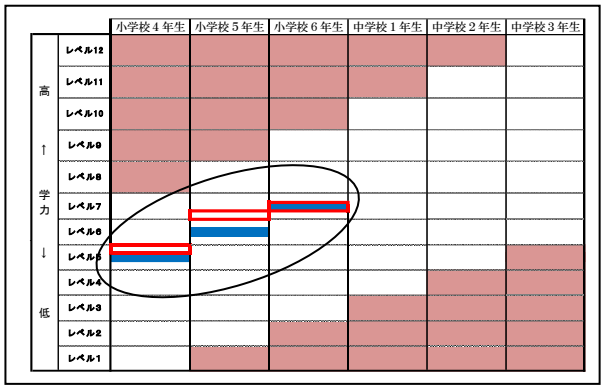
また、発表の仕方を統一することで、児童が思考する順序を確認しながら、自分の考えを表現したり、理解を深めたりすることができるように支援した。

伝え合いの活動

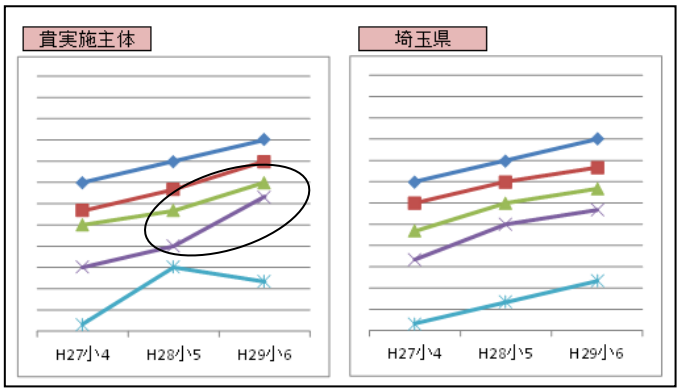
小学校５年生→小学校６年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【国語】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　学力のレベルは、小４時に県平均を下回り、小５時は県平均との差が開いたが、小６時には、県の伸びを上回り、県平均に追いついている。

○　小５から小６にかけて、特に下位層・中位層の「学力の伸び」が大きい。

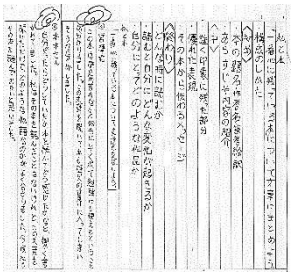
（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　感想を伝え合い、考えを広げ、深める活動の充実

教科書や資料などを読ませる際に、以下のような支援を行った。

①　自分の考えがどの叙述に基づいているか、経験とどのように結びついているかを意識させながら考えをまとめさせる。身近な出来事を例として示し、書き出しマス目黒板を用いて書き方の指導を行う。

②　自分の考えや感じたことの部分に線を引かせることで明確化を図り、他の児童の考えや感じたこととの違いを確認させる。



文の構成と伝え合いの活動

③　特に、中位層から下位層には、理由等を明確にするために、具体的な事柄を箇条書きさせてから、自分の考えをまとめさせる。

イ　目的や意図に応じて、文章構成を考えて書く活動の充実

①　自分の考えを明確に伝えるために、目的や意図、相手に応じて文章全体の構成を示したヒントカードを基にして考えさせる。

②　中位層から下位層には、具体的な例を示し文章構成を考えさせる。

③　読み手の立場に立って文章を書くために、活動の目的を示し、話合いの話型のプリントに従って、ペア学習等を行う。発表を聞き合うことで、文章の見直しもさせる。

学校全体での取組

ア　算数での問題解決型の学習の共通理解・共通指導

学力向上プランを基に、学校全体で板書の仕方等を共通にしている。さらに、学年間の円滑な連携を図り、常に系統性を意識した板書を行ってきた。児童が１時間の学習の流れを想起できるような板書を行うことで、児童に合わせたノート指導を行うことができる。

学力の伸びが小さい児童に対しては、課題、見通しを明確にもたせるとともに、振り返りまでしっかりと行うように支援した。

イ　国語での言語活動の充実を図るための共通理解、共通指導

領域ごとに身に付けたい事項の視点を低・中・高学年ごとに設定した。「Ａ話すこと・聞くこと」の領域では、話し合いの活動についての視点を設定した。また、「Ｂ書くこと」では、交流の場面での視点を設定した。特に「学力の伸び」が小さい児童に対しては、①本時の課題を明確に捉えさせること②しっかりと見通しがもてるようにすること③課題解決に向けて本文中でポイントとなる叙述に気付かせたり、確認したりして解決を図れるようにすることなどの支援をした。

富士見市立針ケ谷小学校の取組

１　本校の概要

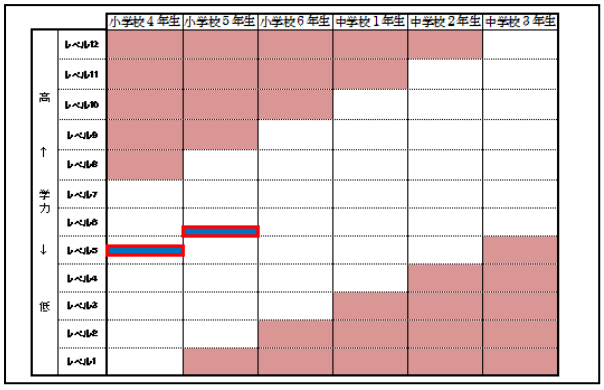
本校は開校 34 年目。児童数 316 名、14 学級の中規模校である。東武東上線みずほ台駅西側から国道 463 号線にかけての学区で、学区内には公園も多く、落ち着いた環境である。保護者の学校教育に対する関心は高く、学校を支援する活動(学習ボランティア・地域清掃・花壇整備等)の参加者も多く協力的である。家庭状況は一様ではないが、子どもとのふれあいを大切にし、愛情をもって育てている家庭が多い。子どもたちは明るく穏やかで、生活態度も比較的落ち着いている。学校教育目標、**「自分で考える子・助け合う子・じょうぶな子」**の実現を目指し、**「子どもたちが期待に胸をふくらませて登校し、笑顔で生活する学校」「子どもたちが生き生きと学び合い、生きる力をはぐくむ学校」**づくりを推進している。

２　平成２８・２９年度の結果

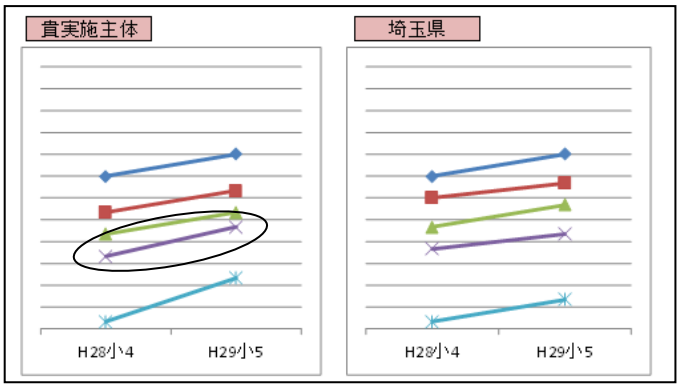
小学校４年生→小学校５年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【算数】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　下位層の学力が大きく伸びている。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　個に応じた少人数指導の実施

個に応じた指導を充実させるため、少人数指導による授業では、どんどんコース、考えるコース、じっくりコースと２学級を３グループに分けることを基本としている。学習内容や児童の状況に応じて２コースに分けるなど、意図的なグループ分けを行った。じっくりコースでは、特に既習事項を確実におさえてから授業を行うようにしている。

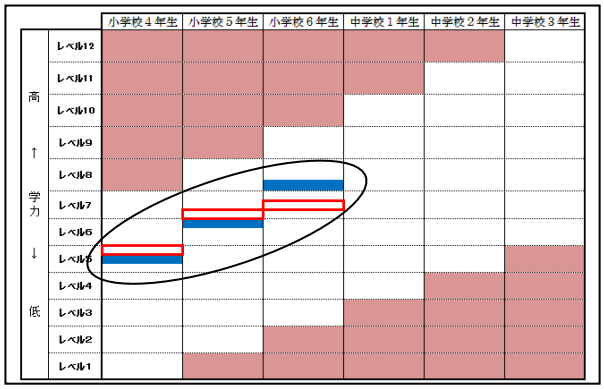
イ　効果的な家庭学習・家庭との連携

次の単元に必要な既習事項が入っている家庭学習を出すことで、スムーズに授業に取り組めるように工夫している。また、児童の学習課題を共有するなど、家庭との連携を深めることで、児童の家庭学習の効果を高め、学力向上を図った。

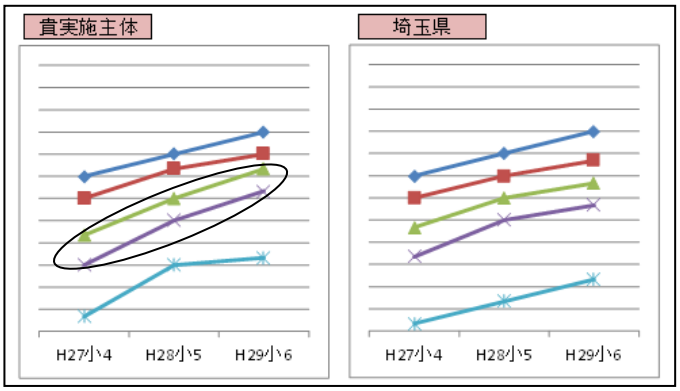
小学校５年生→小学校６年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【国語】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　小４、５年時は県平均を下回っていたが、小６時に大きく伸び、県平均を上回った。

○　中位層・下位層の「学力の伸び」が大きい。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　学校課題研究における国語部会の取組

授業の構造化を図るため、授業の展開として、「自分で考える（主体的）→グループで考える（対話的）→全体で考える（対話的）→自分で考える（深い学び）」という流れで授業を展開した。

課題に対して、児童一人一人が自分の考えをもてるように工夫し、自分の考えを持ったときになぜそう考えたのか、根拠になる文に線を引いたり考えを書かせたりすることを重視した。

また、児童一人一人が活動する時間を多く確保した。

イ　学年間の共通理解・共通行動

２クラスが同一歩調で授業に取り組んだ。経験年数２年目と８年目の教員で学年を構成していたが、若手教員が中堅教員の授業参観を行えるなど、風通しのよい学年経営を心がけた。それにより、若手教員が明確な課題の設定や板書の活用の仕方等の指導法を学ぶとともに、中堅教員も参観されることで授業改善につなげることができた。

学校全体での取組

(1) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり

学校全体で共通理解を図り、「個別の支援や配慮を、最初から全員に向けて行う」「どの子も『わかった』と思える授業」を目指し、学習環境（落ち着いて学習に取り組める教室つくり、板書の工夫等）を整え、授業つくり（学習内容の焦点化・展開の構造化・時間の構造化・場の構造化・指示の出し方の工夫等）に取り組んでいる。

(2) 主体的に取り組める算数プリントの活用

平成 27 年度より算数ドリルではなく、５～10 分で取り組める算数プリントを導入し活用している。印刷したプリントを分類した棚を廊下に配置したことで、業前、授業中、空き時間、家庭学習等で児童が主体的に活用している。全学年のプリントがあるため、前の学年の復習をする児童も多くいる。

算数プリントの活用

(3) 朝の時間帯の活用

朝の 15 分程度の時間を使い、算数・国語がんばりタイムなどを全学年で行っている。各学年で工夫して取り組みながら、説明・丸付け・見直しまで行うことで、児童の苦手、得意な部分を把握し、その後の授業に活かしている。

深谷市立深谷西小学校の取組

1　本校の概要

本校は、深谷市街の西部に位置し、本年度は、開校 57 周年を迎える学校である。全校児童数は、525 人、学級数は 20 の中規模校である。

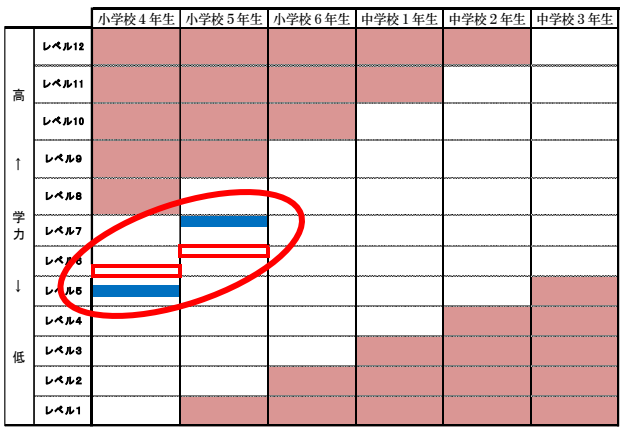
学校教育目標「かしこい子　やさしい子　たくましい子」のもと、めざす学校像～夢や志をはぐくみまごころと思いやりのあふれる学校～真剣に学び、「学校が楽しい」と言える子を育てるとし、全校職員が一丸となって教育活動に取り組んでいる。一昨年度から、研究課題を「児童一人一人の学力向上を目指した指導と評価の工夫」～自分の思いや考えを伝え合う力を育む外国語活動の授業づくりを中心として～と設定し、外国語、国語、算数の授業改善を中心に進めている。

2　平成２８・２９年度の結果

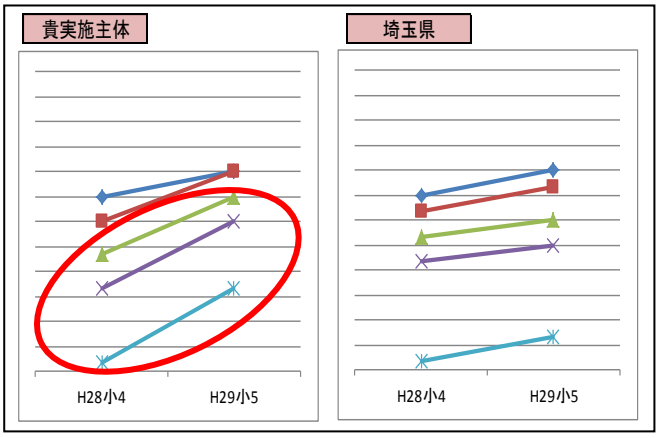
小学校４年生→小学校５年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【国語】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　国語の学力のレベルが７上昇し、県平均を大きく上回っている。

○　全体的に大きな伸びが見られるが、特に下位層・中位層の「学力の伸び」が大きい。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　身に付けさせたい力を明確にした授業づくり

単元ごとに、どのような力を身に付けさせたいのか明確にするとともに、単元終了後の児童の姿（ゴール）を具体的にイメージして授業を組み立てる。

また、６年間の学習の系統性を明らかにした指導計画を作成し、指導事項を確実におさえる。

イ　自分の思いや考えを伝え合う活動の重点化

授業の中で、意図的に根拠や理由を児童に表現させる場づくりを行う。児童の発言に対して、教師が「つなぐ発問」を行い、よりよい表現に高められるように支援する。

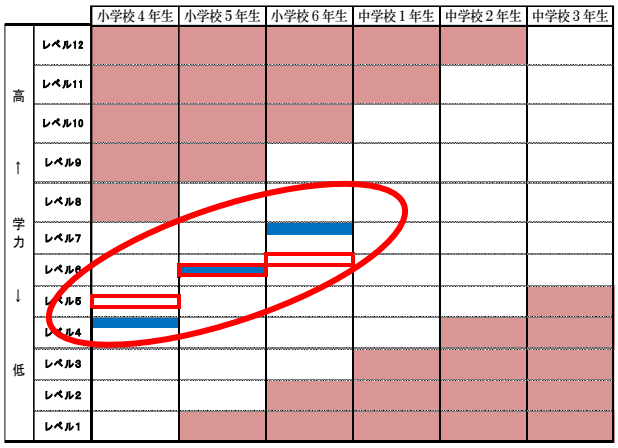
また、付箋などのシンキングツールを活用し、活動を言語化させながら、自己への振り返りを確実に行わせる。

付箋などのシンキングツールを活用した振り返り活動の様子

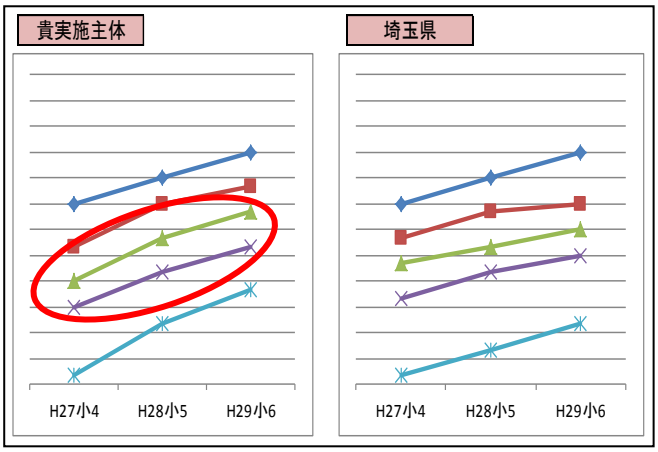
小学校５年生→小学校６年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【算数】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　学力のレベルは、小４時、県平均を下回っていたが、小６時では県平均を大きく上回っている。
○　特に、下位層、中位層の「学力の伸び」が大きい。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　グッドモデルの活用

式や図を言語化させて説明し合う活動を、意図的に授業の中に取り入れていく。クラスやグループで児童が説明し合う中でよい説明の仕方の例「グッドモデル」を児童に作らせ、クラス全体に広めていく。このグッドモデルを活用し、説明活動を行わせることで児童の言語能力を高めるとともに学習内容の定着を図る。

イ　ノート指導案の作成

本時の課題や学習内容を明確にした授業が展開できるようにするために、児童が授業でノートに書く内容を想定しながら、児童と同じノートで例を作り、授業計画を立てる「ノート指導案」を毎時間作成した。

児童のノートを想定した板書により、児童に分かりやすいノートづくりが行えるとともに、ポイントをおさえた授業が行えるようになり、児童が問題に取り組んだり、考えたりする時間を十分確保できるようになる。

あらかじめノート指導案を作成しておくことで、児童の思考の流れがわかるノートになる

学校全体での取組

ア　全員が授業研究を行ったり、市が作成した基本的な授業の型を示した「深谷市スタンダード」を日々の授業で活用したりして、本時の課題とまとめを明確にした授業を心がけた。

イ　学習環境の充実

発表の仕方や学習に効果的な掲示を行い、復習に活用させる。

ウ　学習プリントコーナーの設置

国語や算数を中心とした学習プリントコーナーを整備し、授業や家庭学習に活用させる。

自由にプリントをもらえるプリントコーナーを設置

エ　生活リズム調査

毎週月曜日「早寝、早起き、朝ご飯、朝うんち」調べを実施し、生活リズムを整える支援をする。

春日部市立牛島小学校の取組

１　本校の概要

本校は春日部市のほぼ中央部に位置し、国の特別天然記念物に指定された「牛島の藤」を学区内に有する緑豊かな地域である。昭和 50 年に開校し、今年 43 年目を迎える。広い敷地と緑豊かな環境の中で「豊かな心と進んで学ぶ心を持ち、明るくたくましく生きる児童の育成」を目指している。

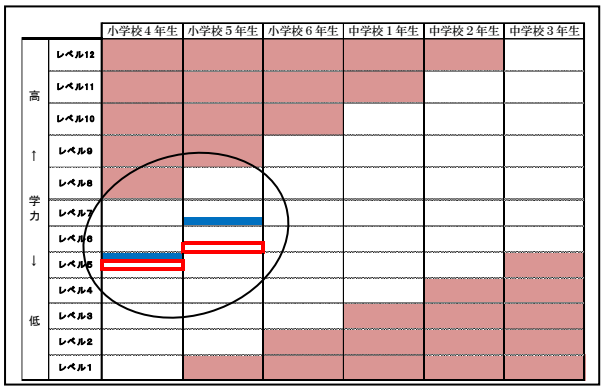
平成 26 年度より春日部市の委嘱を受け、「協同学習」を取り入れた学校課題研修に取り組んできた。本年度より「主体的・対話的に学びを深める児童の育成～協同的な学びを取り入れた授業づくりを通して～」という研究主題のもと、授業改善に努めている。

２　平成２８・２９年度の結果

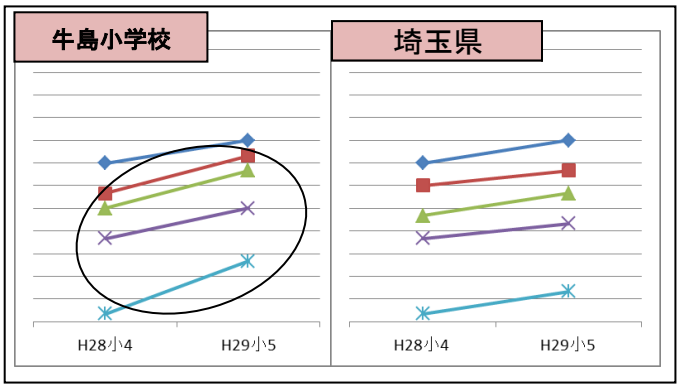
小学校４年生→小学校５年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【算数】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　小から小５にかけて、学力のレベルが４上昇している。

○　低位層、中位層共に「学力の伸び」が大きい。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

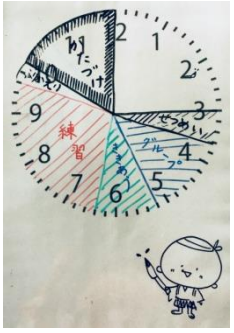
ア　目標を明確にし、見通しをもたせ、振り返る授業づくり

①　授業の初めに目標を明確に示す。目標に向けてどのように取り組んでいくのか、身に付けたい力や成果は何なのか、全員にはっきり分かる表現にする。

例：「なぜ、豆太は『モチモチの木に灯がついている。』と言ったのだろうか。そのわけを探し、考えて、仲間に自分の意見が言えるようになろう。」

②　見通しを立てる際、「学びの時計」を活用する。（右図参照）

③　終わりには目標を、同じ言葉で再度問いかける。



「学びの時計」

イ　確実な適用問題までの実施。（毎時間）

ウ　単元別評価テストを活用した取組

①　単元終了時に、１回目の単元テストを行う。問題ごとに不正解の児童の名前を記録する。

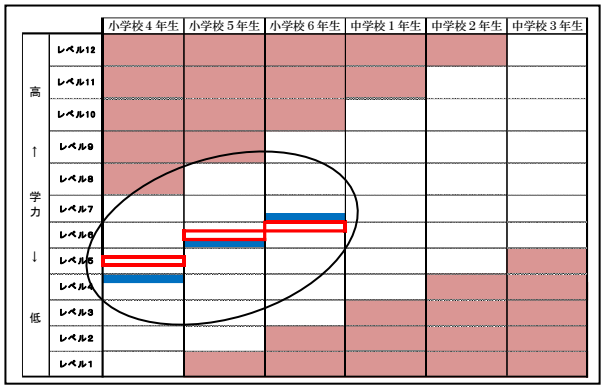
②　学期末に２回目の評価テストを行う。１回目で不正解だった児童が正解したら、メモした名前を消す。 得点とともに、１回目との点数差を記入して返却する。例：↑２０　↓１０

③　２回目で不正解だった児童には、個別指導を行う。

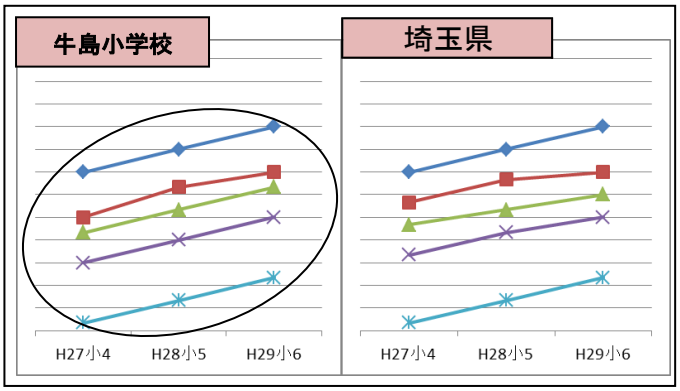
小学校５年生→小学校６年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【算数】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　学力のレベルが小４から小５は４、小５から小６は３と、県平均より大きな伸びを示している。

○　低位層、中位層、高位層ともに伸びている。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　児童が「学び合い」をしやすい環境作り

グループでの聴き合いや全体での共有がしやすいように、常時、机をコの字型で授業を行う。

イ　各種問題集等の活用

①「全国学力テスト問題（学年ごと、単元ごとに分けた問題集を独自に作成）」

②「コバトン問題集」、③「県学調復習シート」、④「春日部市算数検証テスト事前シート」

①から④を授業中や家庭学習、朝学習の課題として活用する。

※各問題を、３年生以上が継続的に使用できるよう、印刷室に分かりやすくファイリングをしておく。（右図参照）

学校全体での取組

ア　「牛島小学校の目指す授業」学校課題研修における共通理解

①　学級のメンバー全員のさらなる成長を追求することが大事なことだと、全員が心から思って学習している授業

②　あたたかく聴き合う関係が成立しており、学習規律が整い、落ち着いて学べる授業

③　子供たちがなかまの力を借り合いながら、課題に向かって一人残らず学びに参加している授業

④　教師自身も協同的に学び合っており、教科の本質を踏まえた教材研究・質の高い課題づくりがなされ、教師の言葉や動きが洗練されている授業

⑤保護者や地域が学校の取組を理解し、協力体制のできている授業（学校）

イ　「分からなさ」「困り感」を出発点とし、学び合う授業づくり

・　「分かった人？」「分かりましたか？」ではなく、「分からない人？」「困ったことはありますか？」という問いかけから始まり、そこから「学び合う」授業づくりを進める。

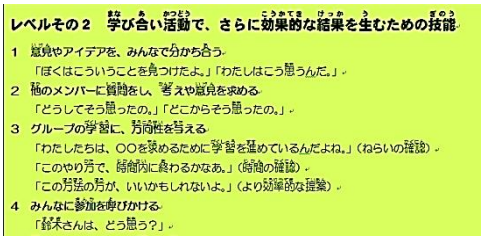
・　「分からなかったら、分からないから教えて、と聞くんだよ。」「聞かれたら、丁寧に（答えではなく解き方・考え方を）教えるんだよ。」という指導を継続する。

※「終わった人は、分からない人に教えてあげてください。」という指導は行わない。

ウ　「あたたかく聴き合う関係」の構築

・　グループの学び合いでは、「自分の考えを伝えなさい」から始めるのではなく、「友だちの話をまず、よく聴くんだよ」から始めるよう指導する。

・　「学び合いの技能シート」をレベル１から４まで作成し、各学級に掲示して活用する。（右図参照）



レベルその２　学び合い活動で、さらに効果的な結果を生むための技能

1　意見やアイデアを、みんなで分かち合う。
「ぼくはこういうことを見つけたよ。」「わたしはこう思うんだ。」

2　他のメンバーに質問をし、考えや意見を求める。
「どうしてそう思ったの。」「どこからそう思ったの。」

3　グループの学習に、方向性を与える。
「わたしたちは、○○を深めるために学習を進めているんだよね。」（ねらいの確認）
「このやり方で、時間内に終わるかなあ。」（時間の確認）
「この方法の方が、いいかもしれないよ。」（より効率的な提案）

4　みんなに参加を呼びかける。
「鈴木さんは、どう思う？」

朝霞市立朝霞第四中学校の取組

１　本校の概要

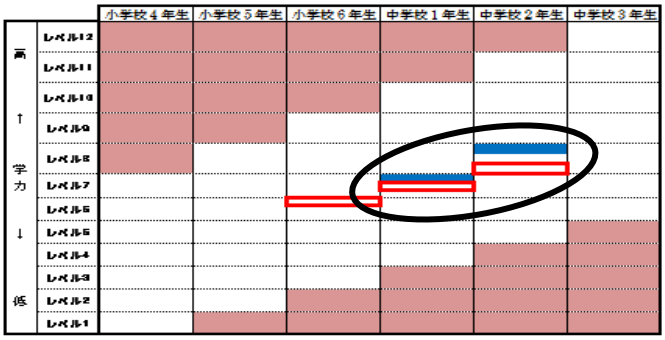
昨年度、創立 40 周年を迎え、卒業生の多くが現在も母校四中のために協力するとともに、地域を支えている。学区内は朝霞市の体育施設や市立図書館等の文化施設があり、教育環境として大変恵まれた地域となっている。学校教育目標は、「自ら学ぶ生徒・心豊かな生徒・たくましい生徒・のぞみつづける生徒」を掲げ、知・徳・体、の項目の最後に、「夢」を加えて、生徒たちの生きる力をはぐくむ学校づくりを行い、「大好き四中」として母校四中を誇りとする生徒の育成を目指している。

２　平成２８・２９年度の結果

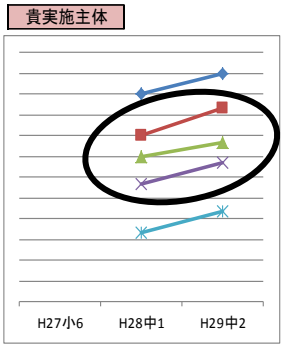
中学校１年生→中学校２年生の取組

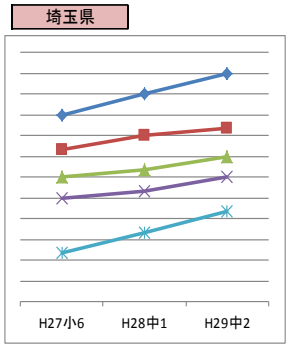
（１）「学力の伸び」から見られる特徴【数学】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況





○　数学の学力レベルで、県平均を大きく上回る伸びが見られた。
○　特に、中位層から上位層にかけての伸びが大きい。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れた授業展開の工夫

単元で１、２時間程度、ジグソー法を用いた話合い活動を実施した。単元のまとめでジグソー法による授業を実施することで、エキスパート活動で既習事項を確認し、ジグソー活動でそれらを組み合わせて発展的な課題の解決を図り、クロストークで解決方法を練り上げるようにした。これにより、自分の言葉で他者に伝える表現力を育成するとともに、既習事項を活用して新たな考えを導き出す発展的な考え方や、共通点を見出すなどの統合的な考え方を身に付けさせることができた。

イ　学習会の実施による個に応じた支援

長期休業中や定期試験前などに学習会を開催した。学習会では、授業でも実施している級別テスト形式のプリントを用いた。単元ごとに、基本的な問題の 10 級から、発展的な問題の１級までのプリントを用意し、合格するごとに上の級に進めるようにした。下位層への基礎・基本の定着だけでなく、中位層以上の生徒への発展的な内容への挑戦となり、生徒が主体的に取り組んだ。

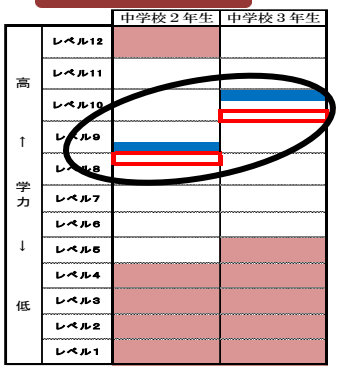
ウ　授業開始時の復習プリント活用による既習事項の徹底

授業開始時に、前単元の授業内容を復習するプリントを、毎時間継続的に５分間行った。問題は基礎・基本に限らず、発展的な内容も含めている。授業開始前の休み時間に係が配布することとなっているが、時間内に終わらない生徒は、次第に授業開始前から自発的に取り組むようになった。

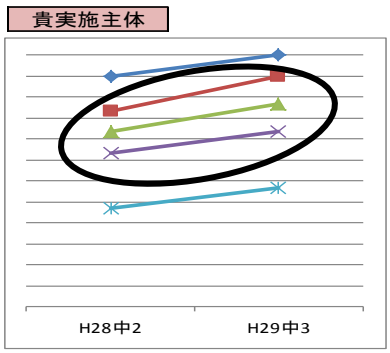
中学校２年生→中学校３年生の取組

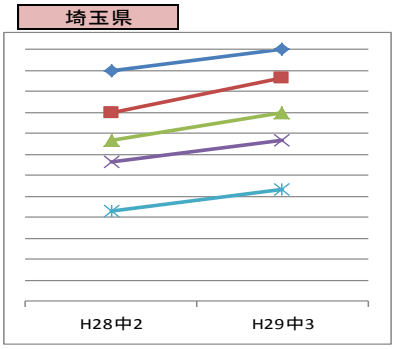
（１）「学力の伸び」から見られる特徴【英語】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況





○　中学２年生から中学３年生にかけて大きく伸びている。
○　特に、中位層から上位層の伸びが県平均を上回っている。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　ペア活動による継続的な基礎的・基本的事項の習得

１年生から毎時間の帯活動として、ペアになり一方が日本語で言った文を相手が英語に直す「弾丸インプット」に取り組ませている。２年生序盤まではフォニックスや教科書の基本文、２年生の中盤からは、埼玉県の公立高校入試の長文から問題を作成した「入試弾丸インプット」に取り組ませた。時間は３分ずつの設定で、20 問前後としている。上位層は全ての解答を終える時間に重点を置いたり、別の生徒に適切な助言を与えることで力を伸ばしたりすることができる。下位層は教え合い活動を通じて効果的にインプットできる。

イ　ＩＣＴ機器や身近な話題を生かした導入の工夫

文法はＩＣＴ機器を活用し、生徒たちが興味をもっているアニメのキャラクターや芸能人を登場させることによって生徒の集中力を高めている。さらに、言語の使用場面を生徒の実生活により近づけるために、普段生徒が話している内容を取り入れて例示するなどの導入の工夫を行っている。

ウ　既習事項を定着させるための場の設定の工夫

①　聞く場面、書く場面、活動する場面などの切り替えを明確にし、授業にメリハリをもたせた。

②　板書はできるだけシンプルにし、生徒が教師の話や生徒の話に耳を傾けるよう徹底するとともに、生徒が問題演習に取り組む時間を確保することで、既習事項の定着につなげている。

③　上位層から下位層までどの段階の生徒も取り組める課題を設定し、話す場面では１回の授業でできるだけ全員に発言する機会を設けている。

エ　パフォーマンス試験におけるＡＬＴの活用

生徒が、直接ＡＬＴと関わる時間が重要と捉え、パフォーマンス試験にＡＬＴを活用している。

学校全体での取組

ア　「目指すべき生徒像」を各教科で設定した上で、達成に向けた学力向上プランを作成し実践している。

イ　「言語活動を踏まえた学びのサイクル」（聴く→考える→まとめる→話す）を意識した授業展開をすべての教科で実施するとともに校内に掲示し、共有化を図っている。

ウ　「四中スタンダード」で授業規律を統一、徹底している。（時間を守る、忘れ物をしない、始業と終わりの礼をしっかりする、返事をし、はっきり答える、集中して聴き、進んで課題に取り組む）

滑川町立滑川中学校の取組

１　本校の概要

本校は、埼玉県のほぼ中央に位置する滑川町にある唯一の中学校である。目の前には国営の武蔵丘陵森林公園があり、緑豊かな環境の中、日々の生活を送っている。また、新興住宅地でもあり、現在も生徒数が増加を続けている。全校生徒数は 597 人、学級数 21 の中規模校である。

学校教育目標「自ら学ぶ生徒（かしこく）　思いやりのある生徒（なかよく）　すすんで心身を鍛える生徒（たくましく）」の下、全教職員が一丸となって教育活動に取り組んでいる。一昨年度から研究課題を「学力向上のための授業改善」と設定し、小・中連携や主体的・対話的な深い学びの視点から授業改善を進めている。

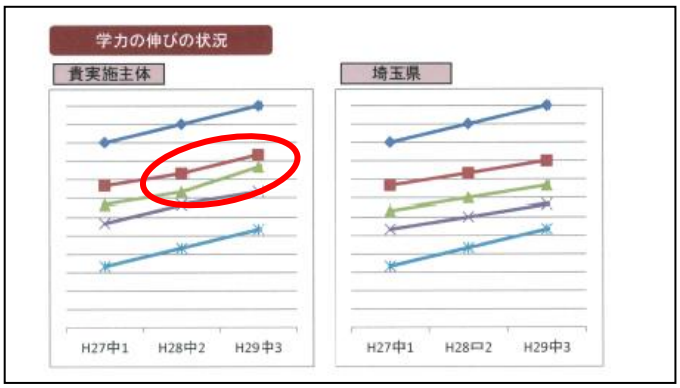
２　平成２８・２９年度の結果

中学校２年生→中学校３年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【数学】

今までの学力の変化

「学力の伸び」の状況



○　「学力の伸び」が県の伸びを上回っている。

○　上位層・中位層の「学力の伸び」が特に大きい。

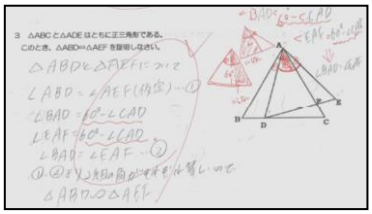
（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　対話的で深い学びの視点に立った授業改善

・　学び合い、教え合う活動を通して、生徒が互いの考えを比較検討し、よさを取り入れながら課題を解決できるようにした。また、ＩＣＴを活用した授業改善や教材開発を行い、視覚的に課題を捉えたり、考えを共有したりすることについて改善を図った。

＜電子黒板を活用した授業①＞

・　単元ごとに、学力のレベルに応じた課題プリントを作成した。難易度の高い問題も意図的に出題しており、授業中だけでなく、休み時間にも生徒が教え合いながら取り組むなどの波及効果を生んでいる。



＜課題プリント＞

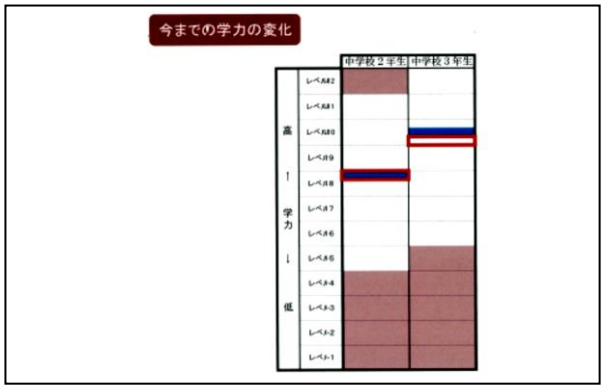
イ　学力向上のための個に応じた学習指導体制

・　数学科では、３学年の全ての時間を２人体制で授業を行っており、丁寧に机間指導することを心掛けた。また、習熟度別学習を行う等、状況に応じて指導形態を変えながら個に応じた学習指導を行った。

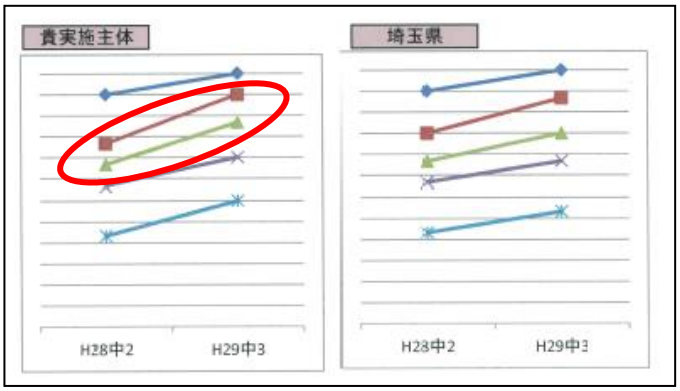
中学校２年生→中学校３年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【英語】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　どの学年も伸びているが、特に上位層と中位層の「学力の伸び」が大きい。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　パフォーマンステストの実施につなげる基礎・基本の徹底

・　既習事項を使った一問一答の会話練習を、１年生２学期から毎時間行い、それを基にした会話テストも各学期に１回行った。様々な習熟度の生徒が全員参加できるように、使用する教材は同じ内容のものを両面印刷して、片方には読み仮名を振った。これにより、全ての生徒が参加しやすくなり、結果としてほぼ全員が会話テストで高得点を取ることができた。

＜電子黒板を活用した授業②＞

・　１年生からの既習文法問題を定期的に授業の最初に行い、授業の最後に採点したものを返却した。採点結果を踏まえた解説と、即座に解き直しを行わせることで定着を図った。

＜英文法確認ドリル＞

・　１年生から継続して教科書の音読を行っている。２年生では、１・２年生両方の教科書を使用して行った。

イ　基礎的な学力の定着を図るための個に応じた学習指導体制

・　週に２回のティーム・ティーチングの授業で、既習文法問題の取組中に複数の教員による机間指導を行い、生徒へのきめ細かな支援を行った。週１回の会話習熟度確認テストでは、一人一人にかける時間を増やすことができ、指導と支援を充実させることができた。

学校全体での取組

ア　１時間の授業の流れの確立

全ての授業で、毎時間ごとに本時の「めあて」を明確にし、学習の見通しをもたせ学習に取り組ませる。また、授業終了後には、「めあて」に立ち返り、各自の言葉で「まとめ」をし、授業の内容の理解を促すと共に、本時の学習内容の価値付けを行っている。

＜生徒のまとめを見取る＞

イ　学習規律の徹底及び授業参観による指導力の向上

落ち着いた雰囲気で授業を受けることは、学習の基本である。各授業において学習規律を徹底することはもちろんのこと、空き時間の教員が担当の時間を決め、授業開始前から授業中にかけ校内巡回を行っている。各教室の廊下側がガラス張りのため、授業の様子が把握しやすくなっている。

ウ　授業参観による指導力の向上

教師が互いの授業を見合い、意見交換をする中で指導力の向上につなげている。

皆野町立皆野中学校の取組

１　本校の概要

本校は、学級数・生徒数、１年２学級 74 名、２年３学級 87 名、３年３学級 84 名、特別支援学級２学級６名の合計 10 学級 251 名（男子 120 名、女子 131 名）の学校である。

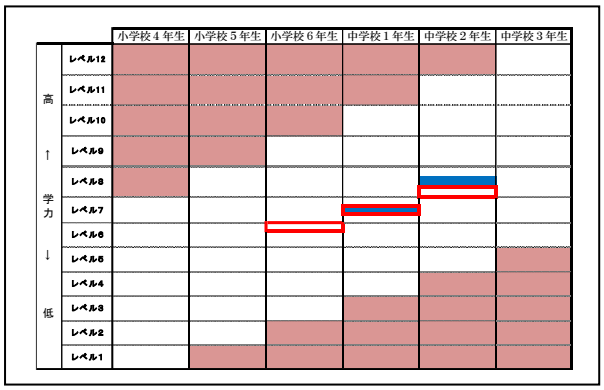
本校は埼玉県教育委員会から「一人一人に目を向けたアドバンスド事業」研究校の指定を受け、「個に応じたきめ細かい指導の充実による学力向上」を主題とし、町内の小学校と連携しながら、３年間継続して取り組んできた。本年度は「未来を切り拓きたくましく生き抜く力を育てる教育の推進～系統的･発展的なキャリア教育の推進とグローバル人材の育成」を研究主題としている。校長、教頭、主幹教諭、各部の部長等による学力向上研究推進委員会を設置し、学習規律･学習環境部会、指導技術向上部会、地域･家庭連携部会の３部会に分かれ、全職員で取組を行っている。

２　平成２８・２９年度の結果

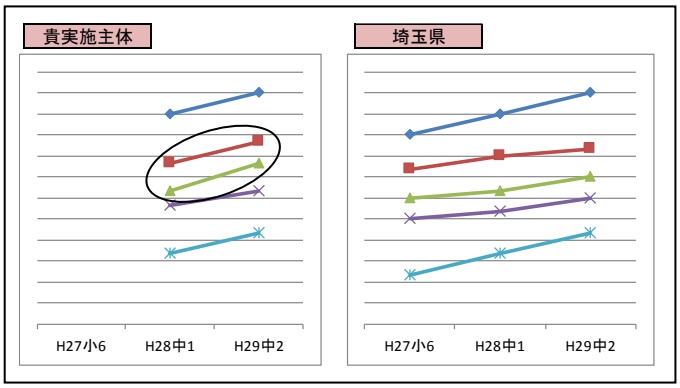
中学校１年生→中学校２年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【数学】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　「学力の伸び」が県の伸びを上回っている。

○　中１から中２にかけて、中位層、上位層の伸びが大きい。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

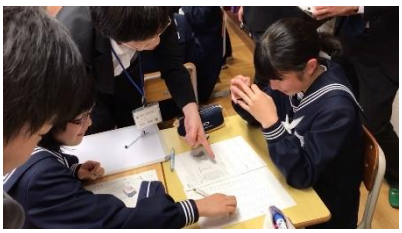
ア　「皆中スタンダード」による授業改善

黒板提示（目標→課題→本日のゴール→振り返り）のプレートの活用を、共通行動事項として取り組んだ。全教員で取り組むことで、目的意識をもった取組ができるようになった。また、数学科では問題解決的な展開の授業を取り入れた。「①学ぶ意欲を引き出す問題設定、②解決の見通しを立たせる、③自力解決、④学び合い、⑤まとめ、⑥振り返り」という授業の流れを大切にし、１時間完結型の授業を目指した。

１時間完結型の授業の様子

イ　自ら考え判断する活動、伝え合う活動の充実

自分の考えや判断とその根拠について、問題の特徴を捉えてグループの話合いで説明できるようにする。一人一人の意見を反映させるとともに、多様な意見交換が行われるように意図的に３人グループとした。自分なりに考え、判断したことをグループ内で説明し伝え合わせることで、視点を共有し、自分の考えをより深めさせるようにした。このような学習活動を繰り返すことで、生徒の学習意欲高まったと考えられる。

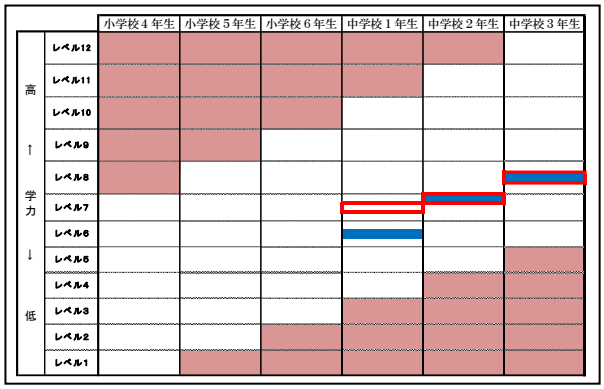


グループでの話合い活動

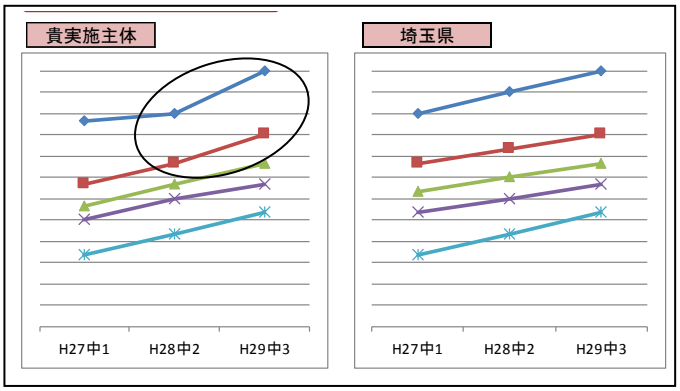
中学校２年生→中学校３年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【数学】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　中２から中３にかけて、上位層の伸びが大きい。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　個別支援プログラムによる個に応じた指導

埼玉県学力・学習状況調査の結果をもとに支援対象とすべき生徒をピックアップし、生徒ごとに担当職員を決め、ｅラーニングを活用した数学のプリント学習の支援をしている。各生徒に対して関わりの深い教員を担当にすることで信頼関係を深め、学習に対する意欲を高めている。適宜、声かけを行ったり、個別に課題を与え、翌朝、提出させたものを採点・返却したり、必要に応じて個別に指導を行ったりすることで、一人一人を確実に伸ばす支援ができる。

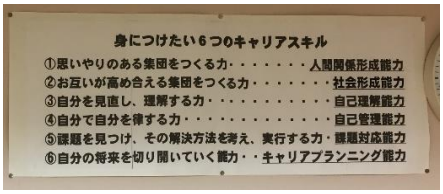
イ　手作りの「計算ノート」による基礎・基本の徹底

授業の最初の５分間で、手作りの「計算ノート」を使って、授業中の問題やワークシートから毎回５問程度を抜き出し、計算テストを行った。繰り返し計算練習を行うことで、計算する力が定着してきた。また、「計算ノート」をポートフォリオとして活用し、教師が定期的に回収・点検することで生徒のつまずきを把握し、基礎・基本の徹底を図ることができた。

学校全体での取組

ア　教科の授業をとおしたキャリア教育

本校の特色として、キャリア教育の４つの基礎的･汎用的能力を細かく６つに分け、「６skills」と命名し、キャリア教育を中心に据えた授業作りに取り組んでいる。各教室の前面には「６skills」の表を分かりやすい言葉にして掲示している。各教科の年間指導計画にもキャリア教育の視点を位置づけ、「６skills」を意識した授業づくりを行うことができた。



各教室に掲示されている「６skills」

イ　「皆野っ子自主学習ノート」の活用

皆野町作成の「皆野っ子自主学習ノート」を活用して、家庭学習の充実を図っている。例えば、各クラスに１冊終るごとにシールを貼る掲示物を作り、生徒の努力の成果が視覚的に分かるようにグラフ化している。また、１人１日１ページ以上をルールとして、主体的な家庭学習を促進するとともに、生活記録ノートも兼ね、担任の負担を軽減しながら習慣化している。さらに、校内自主学習ノートコンテストを開催し、優秀者を表彰することによって、意欲を喚起させている。

皆野っ子自主学習ノート

蓮田市立蓮田南中学校の取組

１　本校の概要

本校は蓮田市の南部に位置し、本年度で開校 38 年目を迎える学校である。全校生徒数は 335 人、学級数 11 の中規模校である。

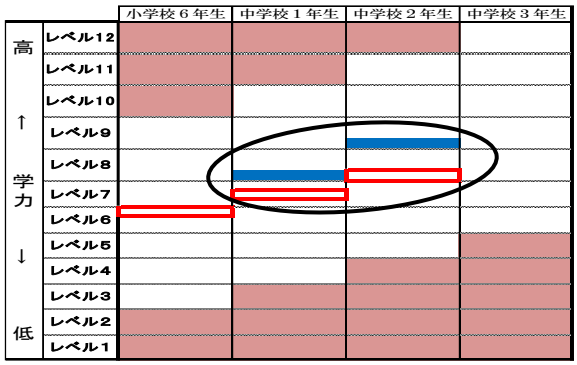
学校教育目標「豊かに　たくましく　夢を求めて　切り拓く生徒」のもと、全教職員が一丸となって教育活動に取り組んでいる。本校では、数年前から継続して研究課題のテーマに「学び合い」を設定し、生徒の学力向上を図ってきた。本年度からは、「自ら学び、考え、表現できる生徒の育成　～学び合い、考えを深め合う授業づくりを通して～」と設定し、授業研究を中心に研究を進めている。

２　平成２８・２９年度の結果

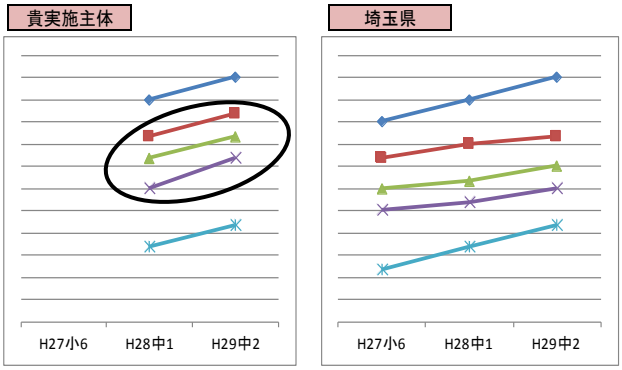
中学校１年生→中学校２年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【数学】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　「学力の伸び」が、県の伸びを上回っている。

○　下位層から上位層までそれぞれ伸びているが、特に下位層の「学力の伸び」が大きい。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　授業の流れを明確化した授業改善

次のような授業の流れを基本としている。①授業の始めに必ず授業のねらい（学習課題）を示す。②解決に向けて自分で考えさせる。③グループで考えさせる。④最後にクラス全員で考えて結論を確認する。加えて、学び合いによるグループ学習を取り入れるなど、主体的・対話的で深い学びを意識した授業を行っている。

学び合いによるグループ学習

イ　基礎・基本の定着を図る学習プリントや小テストの活用

２年前から「蓮田市学力向上プロジェクト学習プリント」を全生徒に取り組ませている。前学期までの基礎・基本のまとめを長期休業中に行い、休業明けに確認テストを行うことで、前学期の復習を徹底している。

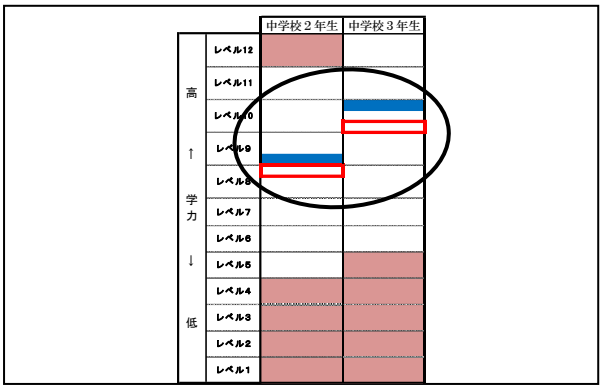
また、小テストを行う際には、ワンポイント・アドバイス（解説）を加えて返却するとともに、類似問題を配布して取り組ませることで、基礎・基本の確実な定着を図っている。

学習プリントの活用

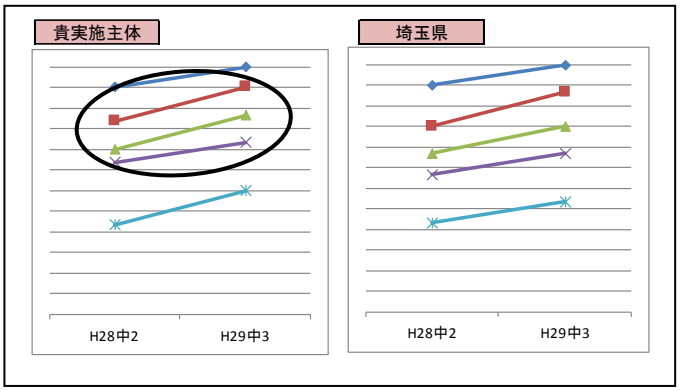
中学校２年生→中学校３年生の取組

（１）「学力の伸び」から見られる特徴【英語】

今までの学力の変化



「学力の伸び」の状況



○　「学力の伸び」が、県の伸びを上回っている。

○　全ての層において伸びが認められる。特に中位層の伸びが大きい。

（２）「学力の伸び」を引き出した効果的な取組

ア　埼玉県学力・学習状況調査の結果を活用した指導重点事項の明確化

埼玉県学力・学習状況調査の結果分析の際に、県から送付された「分析支援プログラム」のクロス集計機能を活用し、「家庭学習と学力」「国語と英語の読解力」「携帯電話の使用時間と学力」等、様々な相関関係を調べ具体的な学力向上プランを作成して指導を行っている。

イ　授業改善に向けた教科内研修の充実

教員が相互参観授業による意見交換を計画的に行うことで、生徒が主体的に学習できる指導法の改善に役立てている。また、ＩＣＴの活用事例や教材を共有し、全員が同じ質の指導ができるようにしている。一つの単元の中で、活動が中心の時間、基礎的・基本的事項習得の時間等、メリハリを持たせ、生徒が意欲的に学習できる指導計画への見直しを教科内研修等で行っている。さらに、家庭学習を習慣化させるために、指導計画に位置付けたり課題の準備を行ったりした。

ウ　学力向上ワークシート等のプリントの活用

東部教育事務所のホームページに掲載されている学力向上ワークシートを活用し、個別指導、補充的指導を放課後等で行っている。また、授業のポイントシート、確認プリント等、習熟の程度に応じたプリントを用意し、授業で活用している。これらは、家庭学習のツールとしても役立っている。さらに、県のホームページに掲載されている県学力・学習状況調査復習シートを全クラスで計画的に実施している。

学校全体での取組

（１）「学力向上プラン」の作成による授業改善

本校では３年前から、埼玉県学力・学習状況調査と全国学力・学習状況調査の結果を全職員で分析し、生徒の実態を明らかにした上で、「学力向上プラン」を作成することで、育成すべき力、生徒の学力を伸ばす学習方法等を明確にしている。この取組により、生徒の実態に応じた学力向上を目指す授業を全職員で行うことができている。

（２）授業規律の徹底

「時を守り、場を清め、礼を尽くす」のように、本校では、「当たり前のことを当たり前に」という凡事徹底を、生徒と教職員の合言葉にしてきた。例えば、全ての生徒はチャイム前に着席していて、教師はチャイムと同時に授業をスタートしている。このような教育環境の整備に取り組むことで、生徒の学習規律が保たれ、生徒の学力向上の基礎となっている。